### 組み込み Rust 講習会

Rust 編

**JIJINBEI** 

2024-08-02

HiCoder

#### Table of contents

- 1. はじめに
- 2. 目標
- 3. Rust とは
- 4. 変数
- 5. データ型
- 6. 配列
- 7. 関数、制御フロー
- 8. 構造体とメソット
- 9. ジェネリック
- 10. トレイト

### Table of contents

- 11. 所有権とライフタイム
- 12. 参照
- 13.  $+\alpha$
- 14. 参考文献

## はじめに

### はじめに

組み込み Rust 講習会へようこそ

この講習会を開いた理由

- 組み込み Rust が難しくて私の学習が進まないので、一緒に学べる仲間を作りたい
- Rust の普及
- ソフト、競プロだけをやるな!!ハードもやれ!!

# 目標

### 目標

- Rust の基本的な文法を理解する
- 難解な所有権、ライフタイムの概念を理解する
- •「基礎からわかる組み込み Rust」や組み込み Rust の公式 ドキュメントを難なく読めるようになる



## Rust とは

#### Rust とは

- Mozilla が開発したプログラミング言語
- Rust は最も愛されている言語として 7 年目を迎え、87% の開発者が使い続けたい と答えている。 [link]
- 最近のオープンソースはすべて Rust で書かれていると言っても過言ではない $^1$

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup>このスライドも Rust 製の Typst で作成

### Rust が好まれている理由

- 安全性
  - ▶ 型安全性
  - ▶ メモリ安全性
    - 所有権
    - ライフタイム
- 処理速度の速さ
- 並行処理
  - ▶ 所有権によるデータ競合の防止
- バージョンやパッケージ管理
  - cargo
- テストがしやすい



# 変数

#### let で変数の定義

```
1 fn main() {
2    let x = 5;
3    println!("The value of x is: {}", x);
4    x = 6; // ERROR
5    println!("The value of x is: {}", x);
6 }
```

#### 変数を可変するには、mut を使う

```
fn main() {
    let mut x = 5;
    println!("The value of x is: {}", x);
    x = 6;
    println!("The value of x is: {}", x);
}
```

# データ型

### データ型(数値)

• Rust は静的型付け言語

大きさ	符号付き	符号なし
8-bit	i8	u8
16-bit	i16	u16
32-bit	i32	u32
64-bit	i64	u64
arch	isize	usize

大きさ	浮動小数点
32-bit	f32
64-bit	f64

表 2: 浮動小数点型

表 1: 整数型

ほかには char 型(a, b, c …)や bool 型(true, false)などがある

# 配列

#### 配列

• 配列は同じ型の要素を持つ

```
1 fn main() {
2    let a: [i32; 5] = [1, 2, 3, 4, 5];
3 }
```

i32 が 5 つの要素を持つ配列 a を定義で配列の長さは変更できない

文字列は文字(char)の配列

文字列は、主に &str 型と String 型がある

```
1 fn main() {
2   let world: &str = "world!";
3   println!("Hello, {}", world);
4 }
```

```
1 fn main() {
2    let mut world: String = String::from("world");
3    world.push_str("!");
4    println!("Hello, {}", world);
5 }
```

String 型は配列の長さを変更できる

String はデータの書き込み、&str はデータの読み込みを行うときに使うとよい

# 関数、制御フロー

### 関数、制御フロー

省略

# 構造体とメソット

#### 構造体とメソット

```
#[derive(Debug)]
                                                                              rust
  struct Rectangle {
      width: u32,
      height: u32,
5
  impl Rectangle {
8
      fn area(&self) -> u32 {
9
           self.width * self.height
10
11 }
12
13 fn main() {
14
      let rect1 = Rectangle { width: 30, height: 50 };
15
16
      println!(
17
           "The area of the rectangle is {} square pixels.",
18
           rect1.area()
19
      );
20 }
```

#### 構造体とメソット

関連するデータと機能を1つの単位にまとめることで、コードの体系化と再利用性が 向上する

new メソットで構造体を生成する書きかたが一般的

```
1 impl Rectangle {
2    fn new(width: u32, height: u32) -> Self {
3        Rectangle { width, height }
4    }
5 }
6
7 fn main() {
8    let rect1 = Rectangle::new(30, 50);
9 }
```

## ジェネリック

#### ジェネリック

プログラムを抽象化すると、コードの再利用性が高まり、可読性が向上する

```
1 struct Point<T> {
2          x: T,
3          y: T,
4 }
5
6 fn main() {
7     let integer = Point { x: 5, y: 10 };
8     let float = Point { x: 1.0, y: 4.0 };
9 }
```

ジェネリック<T>を用いることで、i32 型や f64 型などの複数型を受け取ることができる $^1$ 

この型はエラーを扱うときに用いられる型

<sup>&</sup>lt;sup>1</sup>ジェネリックが用いられている標準ライブラリの例: 0ption<T>, Result<T, E>

トレイトは、複数の型で共有される振る舞い(メソッド)を定義するインターフェー スのような機能

以下の例では、Summary トレイトを定義し、NewsArticle と Tweet 構造体に Summary トレイトを実装している

```
format!("{}, by {} ({})", self.headline, self.author,
14 self.location)
15
16 }
17
18 pub struct Tweet {
19
      pub username: String,
20
  pub content: String,
pub reply: bool,
22
      pub retweet: bool,
23 }
24
25 impl Summary for Tweet {
26
      fn summarize(&self) -> String {
27
          format!("{}: {}", self.username, self.content)
28
29 }
30
31 fn main() {
32
     let tweet = Tweet {
33
          username: String::from("horse_ebooks"),
          content: String::from(
34
```

```
"of course, as you probably already know, people",
),
reply: false,
retweet: false,
};

println!("1 new tweet: {}", tweet.summarize());
}
```

## 所有権とライフタイム

### 所有権の不便な例

#### Rust のキモいところ

```
1 fn main() {
2    let s1 = String::from("hello");
3    let s2 = s1;
4
5    // println!("{}, world!", s1); // ERROR
6    println!("{}, world!", s2);
7 }
```

```
1 fn main() {
2    let s = String::from("hello");
3    takes_ownership(s);
4    // println!("{}", s); // ERROR
5 }
6
7 fn takes_ownership(some_string: String) {
    println!("{}", some_string);
9 }
```

### 所有権のルール

#### 公式ドキュメントにかかれている所有権規則

- 各値は、所有者と呼ばれる変数と対応している。
- いかなる時も所有者は一つである。
- 所有者がスコープから外れたら、値は破棄される。
- 変数をアサインする(let x = y)際や、関数に引数を値渡しする(foo(x))際は、所有 権が移動(move)

#### 参照規則

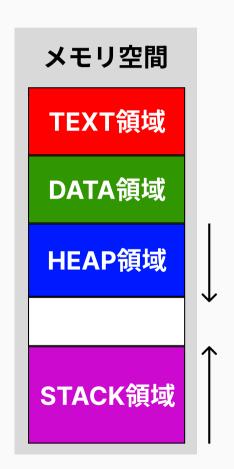
- 任意のタイミングで、一つの可変参照か不変な参照いくつでものどちらかを行える。
- 参照は常に有効でなければならない。
  - **▶ 同義) 生存期間の長いものが、短いものを参照してはいけない**

???????

#### ヒープとスタック

所有権を理解するためには、ヒープとスタックを理解する必要がある

- TEXT 領域
  - ▶ 機械語に翻訳されたプログラム
- DATA 領域
  - ▶ 初期値
    - global 変数, 静的変数
- HEAP 領域
  - 寿命がある値(可変長)
    - malloc()でヒープ領域を確保し、free()でメモリの開放
- STACK 領域
  - ▶ stack(下から積み上げ)をしていく寿命がある値(固定長)
    - 関数の引数、ローカル変数
    - 配列の場合、ヒープ領域を参照するポインタ



### バイナリを見る

#### Rust のバイナリを見てよう

```
1 $ objdump -S binary_file terminal 2 $ objdump -h binary_file
```

.text や.rodata や.bss(heap に対応?)がある

### 所有権のイメージ

所有権は、変数にメモリの解放をする責任を持たせる

知っておくこと

- 値と変数の意味は異なる
  - ▶ 値は具体的なデータで、変数は値の名前
- スコープの領域が展開されると、スタックは下から積み上げられ、ヒープで値を確保される
- 所有権を持っている変数たちは、スコープの外で、ヒープのメモリは解放され、ス タックはポップされる
- &で値を参照したら返さないといけない(借用)

イラストで理解しよう!!

### 文字列の実態

String の実態はポインタ、長さ、容量の3つの要素とヒープ上の文字列(値)

&str の実態はポインタと長さの 2 つの要素とヒープ上の文字列

⇒ スタック領域のデータは固定長に落ちている

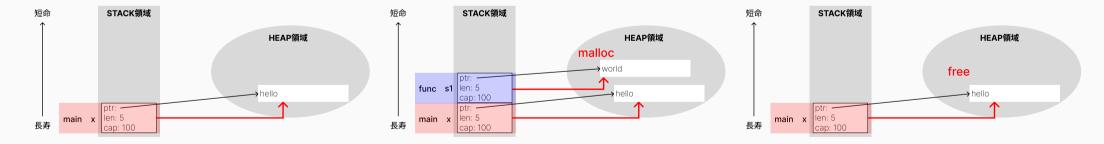
### 所有権のイメージ(値と変数)

s1 と s2 は、同じ値を指している

s2 が s1 の後に使えないのは、値を持っている所有権が s2 に移動しているから

## 所有権のイメージ(スコープ 1)

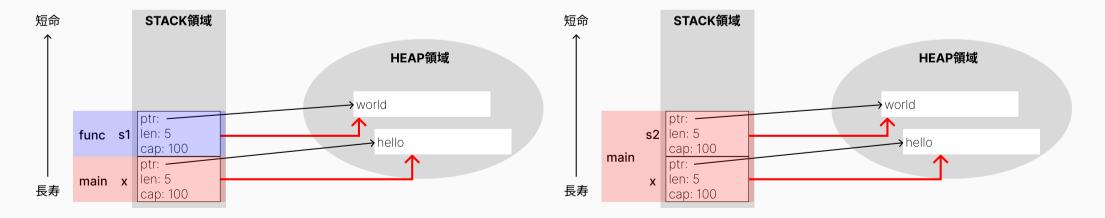
```
1 fn main() {
2    let x = String::from("hello");
3    func();
4 }
5 
6 fn func() {
7    let s1 = String::from("world");
8 }
```



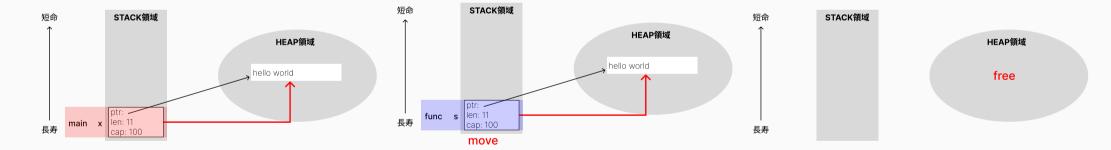
func のスコープの外で所有権を持っている s1 が破棄される

# 所有権のイメージ(スコープ 2)

```
1 fn main() {
2    let x = String::from("hello");
3    let s2 = func();
4 }
5 
6 fn func() -> String {
7    let s1 = String::from("world");
8    s1
9 }
```



# 所有権のイメージ(所有権の移動)



引数に所有権を渡すと、所有権が移動する

このあと、xを使うことができない

# 所有権のイメージ(借用)

- f は x の値を借りている
- f のほうが寿命が短いので、x を参照できる
- func(&x)のあとでxは、メモリを解放されていないので使うことができる
- 参照している間に、x を変更することはできない

## では、こちらはどうなる?

```
1 fn main() {
2    let x = f();
3 }
5 fn f() -> Vec<String> {
6    let mut v = vec![String::from("hello")];
7    let a: String = String::from("!!");
8    v.push(a);
9    v
10 }
```

```
1 fn main() {
2   let x = f();
3 }
5 fn f() -> Vec<&str> {
6   let v = vec!["hello", "world"];
7   let a: &str = "!!";
8   v.push(a);
9   v
10 }
```

### では、こちらはどうなる?

#### それではこちらはどうなる?

```
1 fn main() {
2    let s = "hello";
3    let x = f(s);
4 }
5 
6 fn f(s: &str) -> Vec<&str> {
7    let mut v = vec!["hello"];
8    v.push(s);
9    v
10 }
```

# 参照

# 参照

- まず参照は危険という認識が必要
  - ▶ 参照先を書き換えると、そのデータを利用している他の参照にも影響がある

可変な参照を行うには、

```
1 fn main() {
2    let mut s = String::from("hello");
3
4    change(&mut s);
5 }
6 
7 fn change(some_string: &mut String) {
8    some_string.push_str(", world");
9 }
```

制約として、可変な参照は1つのスコープ内で1つしか持てない

#### ライフタイム

- x のほうが f よりも長く生存している
- func あとに x を使えるか使えないかは
  - ▶ heap のメモリが解放されているかどうか
  - ▶ 所有権を持っているかどうか

ライフタイム(その参照が有効になるスコープ)が自然にわかる

### メモリ安全性

ヒープ領域が free されると、スタック領域にあるポインタが無効になる 所有権では絶対に以下の問題が起こらない

- ダンダリングポインタ:メモリ領域の無効な場所を指し示しているポインタ
  - ▶ 2 重 free が起こると、メモリの破壊が起こる

#### 問題 1

#### 通る?

```
1 fn main() {
2  let mut v = vec![1, 2, 3, 4, 5];
3  let first = &v[0];
4  v.clear();
5  println!("The first element is: {}", first);
6 }
```

### 問題1

#### 通る?

```
1 fn main() {
2   let mut v = vec![1, 2, 3, 4, 5];
3   let first = &v[0];
4   v.clear();
5   println!("The first element is: {}", first);
6 }
```

- v の要素への参照を保持したまま、v の内容をクリアしている
- 無効な参照を引き起こす可能性があるため、コンパイラによってエラーとして検出 される

```
1 fn add_to_slice(slice: &[str], new_item: &str) {
2    slice.push(new_item);
3 }
4
5 fn main() {
6    let mut words = vec!["hello", "world"];
7    let slice = &mut words[..];
8    add_to_slice(slice, "!");
9 }
```

```
1 fn add_to_slice(slice: &[str], new_item: &str) {
2    slice.push(new_item);
3 }
4
5 fn main() {
6    let mut words = vec!["hello", "world"];
7    let slice = &mut words[..];
8    add_to_slice(slice, "!");
9 }
```

&[str]は push というメソッドを持っていない

もっていたとしても、所有権を借りている身で words の配列の長さを変更することは できない

#### 問題 3

```
1 fn get_slice_length(slice: &[str]) -> usize {
2    slice.len()
3 }
4
5 fn main() {
6    let words = vec!["hello", "world"];
7    let slice = &words[..];
8    println!("Slice length: {}", get_slice_length(slice));
9 }
```

```
1 fn get_slice_length(slice: &[str]) -> usize {
2    slice.len()
3 }
4
5 fn main() {
6    let words = vec!["hello", "world"];
7    let slice = &words[..];
8    println!("Slice length: {}", get_slice_length(slice));
9 }
```

&[str]で参照渡しをしており、データの所有権を移動していない データの長さを取得している(非加工)ので、問題ない

```
struct Person {
                                                                               rust
2
3
4
5
      name: String,
      age: u32,
  fn main() {
      let p = Person {
8
           name: String::from("Alice"),
           age: 30,
10
      };
      let name = p.name;
12
13
      println!("The person's age is: {}", p.age);
14
      println!("The person's name is: {}", p.name);
15 }
```

```
struct Person {
                                                                              rust
      name: String,
34
      age: u32,
5
  fn main() {
      let p = Person {
8
           name: String::from("Alice"),
           age: 30,
      let name = p.name;
12
13
      println!("The person's age is: {}", p.age);
14
      println!("The person's name is: {}", p.name);
15 }
```

構造体の一部のフィールド(name)を移動させると、元の構造体全体が部分的に移動した状態になり、移動されたフィールドにアクセスできなくなる



#### $+\alpha$

#### 追加でしゃべりたいこと

- Result と Option の使い方
- ptr と len の万能さ
  - ▶ 配列のスライス
  - ・ 文字列の抽出
  - ▶ Copy しないことのメモリ効率
- 'static, const のデータは. rodata にある
- let x = 5; let y = x;は Copy なので注意
- Rust はバッファオーバーフロー攻撃がないメモリ安全
- 型安全性

# 参考文献

## 参考文献

- The Rust Programming Language 日本語版 [link]
  - コードをたくさん引用しました。ありがとうございます。
- •【Rust 入門】宮乃やみさんに Rust の所有権とライフタイムを絶対理解させる [link]
  - ▶ 所有権の世界一わかりやすい説明